

2017 年度 デザイン工学部

# 自己点検・評価報告書

2017 年 12 月 6 日

# 目次

<b>第 1 章 理念・目的</b>	<b>1</b>
① 大学の理念・目的を適切に設定しているか。また、それを踏まえ、学部・研究科の目的を適切に設定しているか。 .....	1
② 大学の理念・目的及び学部・研究科の目的を学則又はこれに準ずる規則等に適切に明示し、教職員及び学生に周知し、社会に対して公表しているか。 .....	1
③ 大学の理念・目的、各学部・研究科における目的等を実現していくため、大学として将来を見据えた中・長期の計画その他の諸施策を設定しているか。 .....	1
<b>第 4 章 教育内容・方法・成果</b>	<b>6</b>
① 授与する学位ごとに、学位授与方針を定め、公表しているか。 .....	6
② 授与する学位ごとに、教育課程の編成・実施方針を定め、公表しているか。 ....	7
③ 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。 .....	8
④ 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。 .....	11
⑤ 成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。 .....	12
⑥ 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。 ..	13
⑦ 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。 .....	14
<b>第 5 章 学生の受け入れ</b>	<b>17</b>
① 学生の受け入れ方針を定め、公表しているか。 .....	17
② 学生の受け入れ方針に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や運営体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。 .....	19
③ 適切な定員を設定して学生の受け入れを行うとともに、在籍学生数を収容定員に基づき適正に管理しているか。 .....	19
④ 学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。 .....	20
<b>第 7 章 教員・教員組織</b>	<b>23</b>
① 大学の理念・目的に基づき、大学として求める教員像や各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。 .....	23
② 教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。 .....	24
③ 教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。 .....	25
④ ファカルティ・ディベロップメント (FD) 活動を組織的かつ多面的に実施し、教員の資質向上及び教員組織の改善・向上につなげているか。 .....	25

⑤ 教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。 .....	25
---	----

## 第 1 章 理念・目的

### 〈 1 〉 現状説明

- ① 大学の理念・目的を適切に設定しているか。また、それを踏まえ、学部・研究科の目的を適切に設定しているか。

21 世紀の社会と産業は、幅広い工学の素養や技術をバックグラウンドに持ち、同時に人の感性に応えるものづくりができる人材、つまり、コンセプトが明確になっていない段階からアイデアを生み出し、リーダーシップをもって個々の要求を整理・統合化し、ものづくりができる能力が必要とされる。

このような認識をふまえ、建学の精神である「社会に学び、社会に貢献する技術者の育成」をデザイン工学部では、デザインと工学の融合教育をとおして、社会の動向を鋭敏にとらえ、それをものづくりに直接、間接的に反映できるデザイン能力を具備し、広く社会に奉仕する技術者の育成を実現しようとしている。

そのため、学部の理念としては、工学と人間の感性および社会との調和・融合を図り、創造的なものづくり能力を素養にもつ実践的人材育成を目指し、デザインを追求する社会と向き合った教育の徹底を掲げている。

また、デザイン能力を高めるために、芝浦という都心立地を最大限活用した「社会および産業界と密に連携を取った体験学習」を通じて、社会の中で現実的に効果を発揮するデザインを追求した教育を徹底する。

- ② 大学の理念・目的及び学部・研究科の目的を学則又はこれに準ずる規則等に適切に明示し、教職員及び学生に周知し、社会に対して公表しているか。

大学 WEB サイトに掲載することで社会に公表する一方、所属学生に対しては入学時に配布する学修の手引きに記載し、ガイダンス等を通じて周知を図っている。

また、オープンキャンパスの際の模擬授業や全学共通科目「芝浦工大通論」においても説明されているほか、高校訪問や出張授業など、様々な機会を通じてデザイン工学部の理念と目的の周知を計っている。

- ③ 大学の理念・目的、各学部・研究科における目的等を実現していくため、大学として将来を見据えた中・長期の計画その他の諸施策を設定しているか。

デザイン工学部では、教授会における学則改訂を審議する際や学部の将来を検討する委員会等の席において、理念・目的が社会の変化や教育体制の改革に対応しているかを検証している。

特に 2015 年度に新デザイン工学部カリキュラムを準備するための委員会が発足して以降、教育理念と教育目標の整合性を含め、様々な視点から理念と目的の適切性について検討を加えてきた。

また、2017 年度からは、教務委員会にカリキュラム検討の機能を集約し、大学が掲げる「単位の実質化」等への取組も積極的におこなっている。

100 周年に向けた以下のような議論を学部長室会議等で本年度よりはじめている。

- ・学部そのもののあり方（教育研究領域、学生数、施設等々）の検討
- ・グローバル化に向けた学部構成の検討（国際コースの設置検討）
- ・男女参画、グローバル化を見据えた人事計画

## 〈 2 〉 長所・特色

---

### ① 学部の理念・目的の適切な設定

デザイン工学という研究教育領域は、これまでの工学系やデザイン系とは異なる新しい研究教育領域であるが、幸い、デザイン工学部のディプロマ・ポリシー（学修・教育目標）ならびにカリキュラム・ポリシーが社会に評価され、社会が求めるものづくり人材の育成という目標が着実に達成されていると考えられる。

1) 教育成果としての評価：デザイン工学部は開設以来、常に高い入試競争率と堅実な就職実績を挙げてきた。就職においては、完成年度以降常に 9 割以上の就職率を記録しており、2016 年度も 98% と堅調に推移している。就職先についても、製造業を中心に、卸売・小売業、サービス業など、旧来の工学部の枠組みを超えて、製品の開発、製造、販売に関わるあらゆる企業のデザイン、企画、販売、製造部門に学生を送り出している。

2) 教育理念の社会への浸透としての評価では、高校訪問を積極的に実施した結果、出張授業や高大連携のリクエストも多く、オープンキャンパス等の大学主催のイベントでも、多数の見学者を記録している。デザインならびに、デザインを学んだ結果得られる将来への展望含め、高校生や保護者の関心は高く、特に理系女子の受け皿としても期待されていることがわかる。

さらに、2017年度より始まった新カリキュラムでは、これらの成果をふまえ、社会の新たなニーズを取り込みながら、現行の理念を生かした教育を推進している。

加えて、新カリキュラムを効果的に実現していくために、横断的に多様な専門領域の教員がその教育にあたっていることが大きな特徴である。

## ②学部の理念・目的の明示ならびに教職員および学生への周知、社会への公表

所属学生へはガイダンス等、様々な機会を通じて周知が図られている。

また、学部独自の web サイトの充実、一階入口での学習成果の展示、総合プロジェクトの学外展などを通じて、教育内容ならびにその成果を広く公表している。

## ③学部の理念・目的を実現していくための中長期計画の設定

2017年度にスタートの新カリキュラムを検討するに当たり、教授会や新デザイン工学部準備委員会を中心に現行の理念を踏まえた新しい教育達成目標が提案され、学部長室会議や学科会議における確認・検討の上で承認された。また、学部長室会議を中心に継続的に学部の理念・目的を適切に定期的に検証するしくみもできている。

# 〈3〉問題点

---

## ①学部の理念・目的の適切な設定

1) 他の学部、領域に比べ、学部の理念・目的を実現する教育のあり方が、一般的な通念として明確になっているわけではない。また、学部の特性上、多様な専門領域の教員が集まっている。したがって、教育研究における不確定で多様な意見が常に、学部内の議論の中で内包されている。そのため、常に議論が必要であり、学部内でのコンセンサスをとる必要がある。このことは、学部としての特徴であるとともに、新領域を開拓していく上でのハードルとなっており、現状は、このことが活発な議論を生み、学部の活性化に繋がっているが、早い決断や多様な問題に対する適切な対応などでは、障害になる危険がある。

2) 前述の通り、出張授業や高大連携の高いリクエストに答えるだけのメニューが不足している。今後、デザイン工学の特徴を生かした学部、高校ならびに社会人向けの教育コンテンツの充実が急務である。

3) グローバル化が一気に進んでいるが、それに対応可能な人材は充分であるとは言いがたい。若手教員を中心に海外経験を促進する必要がある。

4) 設置時からの教員が定年をむかえるにあたり、新任、若手教員に対する学部のディプロマ・ポリシー（学修・教育目標）ならびにカリキュラム・ポリシーの理解の促進と今後のあり方の議論を通して、次世代教員の育成が必須である。

## ②学部の理念・目的の明示ならびに教職員および学生への周知、社会への公表

社会への公表の一環として、webサイトの充実、学習成果の展示・発表に努めているが、その周知は充分でなく、それらの実施を広く知らしめるための広報課の利用、高校・関連公共機関への通知に努める必要がある。また、前後期末に行われている授業成果発表会の一般公開を検討するなどの新たな施策が必要である。

## 〈4〉全体のまとめ

---

学部の理念では、工学と人間の感性および社会との調和・融合を目指して、社会と向き合った教育による創造的なものづくり能力を素養にもつ実践的人材育成をあげている。

そのため、2017年度からは、「単位の実質化」や100周年に向けた様々な施策（学部そのもののあり方、グローバル化、人事計画）へ学部長室会議を中心に積極的に取り組もうとしている。

学部の理念・目的の公表に努めた結果、設立してから短期間に、関係者の努力もあり、急速に社会的認知度は高まり、入口（入試）ならびに出口（就職）での好成績にあらわれている。今後も、これを継続する努力が必要であると考えます。

なお、

1) 学部の理念・目的を実現する教育のあり方が、一般的な通念として明確になっていないため、学部内でのコンセンサスをとる議論が必要であり、障害になる危険もある。

2) 出張授業や高大連携のメニュー不足

などの問題もある。

しかし、デザイン工学に対する関心、必要性は海外でも認知されており、アジア、オセアニア、ヨーロッパなどのいくつかの大学（UNIST、ソウル科学技術大学校に同様の学科を設置、ラフバラ大学のデザイン学部など）と連携することで、デザイン工学領域での国際連携のハブ大学としての役割を担うことが期待されている。

## 〈 5 〉 根拠資料一覽

---

-



## 第4章 教育内容・方法・成果

### 〈1〉現状説明

#### ① 授与する学位ごとに、学位授与方針を定め、公表しているか。

デザイン工学部では、大学の学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）と整合性のとれた、デザイン工学部としてのディプロマ・ポリシーを設定し、本学のWEBサイトに公表している。デザイン工学部のディプロマ・ポリシーでは、「社会が求める『あるべき姿（当為）を構築する設計科学技術』を身につけ、工学的知識と技術を基礎として、人間の感性および社会との調和・融合を図り創造的ものづくり能力、すなわちものづくり全体を表現するための1) 認識力、2) 構想力、3) 計画力、4) 意匠・設計力というデザイン能力を身に付けること」を教育の到達目標としている。

この方針に基づいて、教育研究上の目的を「多様な価値観を背景とした現代社会において、認識力、構想力、計画力、意匠・設計力といったデザイン能力に富み、「人」の心に響く魅力あふれたものづくりを志す人材を養成する」ことと定め、学習・教育目標を以下A-Iの9つに定めている。

A. 技術と人間・社会・自然との関連についての幅広い知識を身につけ、地球的視点・歴史的視点もふまえながら多面的に物事を考えることができる。

B. 技術が社会や自然に及ぼす影響や効果、および技術者が社会に対して負っている責任を理解し、社会に貢献する技術者として倫理観に基づき判断し行動できる。

C. 数学、自然科学、および情報技術の基礎的な考え方を理解し、それらを応用することができる。

D. 種々の科学、技術および情報を活用して社会の要求を解決するためのデザイン能力

E. 当該分野において必要とされる専門的知識とそれらを応用する能力

F. 論理的な記述力、口頭発表力、討議等のコミュニケーション能力

G. 将来にわたる社会変化を見越してキャリアデザインを行い、そのために必要な学修を自主的・継続的に行うことができる。

H. 与えられた制約の下で計画的に仕事を進め、完遂することができる。

I. チームのメンバーやリーダーとして活動し、チーム総体としてより良い成果を出すことができる。

学生が修得すべき知識は、主に上記の A、C、E による。また技能は主に D、E、F、態度は B、F に対応する。学修・教育目標 A-I は毎年新入生に配布する学修の手引き（本学 WEB サイトにて閲覧可能）に、到達目標と学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）と共に記載し、新入生ガイダンス等を通じて説明・周知している。

## ② 授与する学位ごとに、教育課程の編成・実施方針を定め、公表しているか。

デザイン工学部ではディプロマ・ポリシーに掲げる目標を達成するためのカリキュラム・ポリシーを設定し、WEB サイトに公表している。カリキュラム・ポリシーは、「工学と人間の感性および社会との調和・融合を図り、創造的なものづくり能力を素養にもつ、実践的な人材を育成するため、次に示すような科目を編成し、教育目標を達成する」としている。

デザイン工学部の授業科目編成は、「共通教養科目」、「共通基礎科目（サイエンス科目、エンジニアリング科目、デザイン科目）」、「専門科目」に大別される。「共通教養科目」は、最先端の知識を吸収し、実社会において海外の企業や外国人技術者と接していく上で必要不可欠である外国語科目、現代の技術者に求められる高い倫理観や人文社会科学系の素養を身につけるための一般教養科目、また自分自身の将来のキャリアデザインを見据えるためのキャリア教育科目を設置している。「共通基礎科目」には専門科目を学んでいく上で基礎となる能力を養うために、数学や物理などのサイエンス科目、情報処理といった工学基礎を学ぶエンジニアリング科目、そしてデザインの考え方や基礎を学ぶデザイン科目を配置している。それぞれの科目に必修科目が指定されており、実践に耐えうる学力を養成する。「専門科目」は各領域の教育方針に沿った専門科目が配置されている。基礎的な科目を低学年次に、専門性や応用性の高い科目を高学年次に学ぶことで、学習の積み重ねが効果的に発揮されるようなカリキュラム構成をとっている。これらの科目を講義、演習、実験、実習により体系的に編成して、学生の主体的・能動的な学修・研究を促す教育方法を実施し、その学修成果を多面的に評価し、学生の振り返りを促すことにより、教育目標を達成している。4 年次には、それまで養ってきた総合的な学力を集約するものとして、総合プロジェクトを必修科目として配置している。図 1 にデザイン工学部の教育課程の編成を示す。

これら全開講科目の科目区分、必修・選択の別、単位数はそれぞれ全学生に配布される学修の手引きの科目配当表・科目配置票、および大学 WEB サイト上で公開されているオンラインシラバスに明示されている。

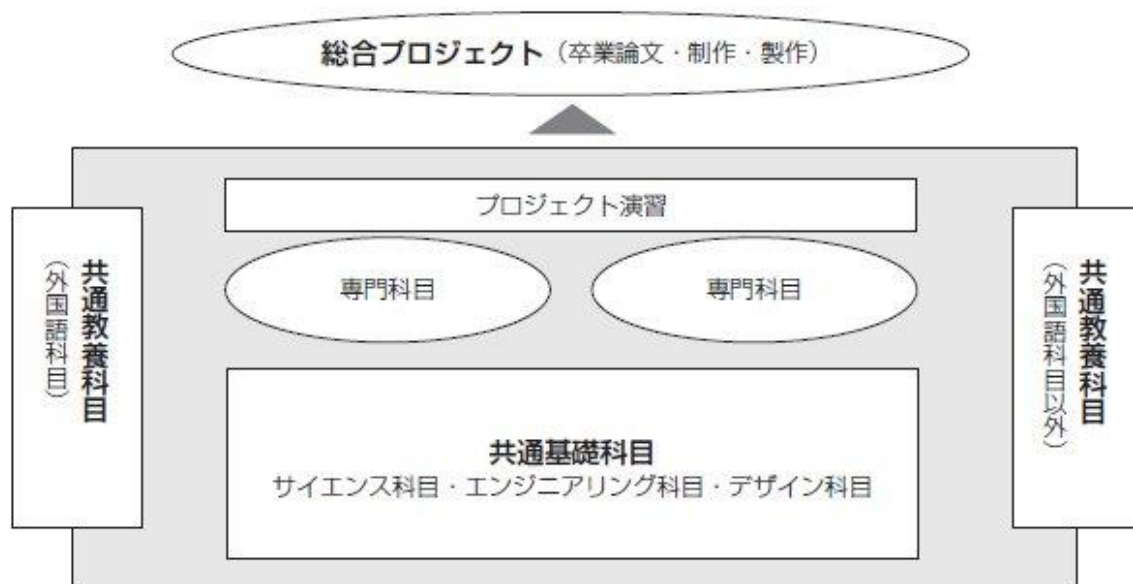


図 1. デザイン工学部の教育課程の編成（学修の手引きに記載）

③ 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

デザイン工学部では、毎年、全入学生に配布される学修の手引きに教育理念、到達目標と学位授与方針とならんでカリキュラムマップを記載し、デザイン工学部の教育目標と全開講科目との関連性を明示しており、目標・方針と教育課程の整合性を確認できる。これらは入学時のガイダンス等を通じて新入学生に周知されており、学生の認知度も高い。

教育課程の編成にあたっては、図 1 に示す体系をもとに基礎的な科目を低学年次に、専門性や応用性の高い科目を高学年次に配置することで、学習の積み重ねが効果的に発揮されるよう十分に配慮している。

デザイン工学部では 2016 年に卒業要件に関する単位をすべて見直し、単位制度の趣旨に沿った単位を設定し、2017 年度の入学生から適用している。また、2017 年からは時間外学修時間をすべてのシラバスに明示することで、教員、学生がともに単位の実質化を意識した学修を実践している。

個々の授業科目が、どのような学修・教育目標に対応しているかは、学修の手引きに掲載しているカリキュラムマップですべて確認できる。またすべての授業のシラバスに3つ以上の達成目標が掲げられており、個々の達成目標がカリキュラムマップにおける学修・教育目標のどの項目と関連しているかも明示している。

デザイン工学部の教育課程は、「産業界と密に連絡を取りながらカリキュラムを構築し、実習などを通じて社会と人にふれあい、人と地球にやさしいデザインを追求する実践教育の徹底」を行っている。また様々な分野にまたがる協力・協働と、社会的・産業的な幅広い視点からのデザイン能力を身につけるため、以下の2つの系の下にそれぞれ3つの履修モデルを置いて教育課程を編成している。

① 生産・プロダクトデザイン系

a.プロダクトデザイン、b.データ駆動デザイン、c.生産

② ロボティクス・情報デザイン系

a.情報デザイン（UI/UXデザイン）、b.ソフトウェア、c.ロボティクス

この幅広い領域のどこに焦点を当てて学修し、将来何の仕事に携わるかなど技術者としての職業意識を養い、履修指導をしている。履修にあたり、学生自身の将来像を意識して学修できるように、デザイン工学を俯瞰的に学びつつ、同時に1年次から系のカラーを持たせたカリキュラム構成としている。また、入学時に卒業後の進路に対応した学修スケジュールの基本と成る履修モデルを提示することで、養成する人材を明確にするとともに学生が主体性を持って4年間の学修計画をたてられるよう配慮している。

共通教育においては、今日的な問題に対する多様なアプローチを構築する能力を醸成するために2つの共通教育科目群を設置している。具体的には、人間・社会を理解するための科目を中心とした「共通教養科目」、そして工学とデザインの基礎知識を習得するためのサイエンス科目、エンジニアリング科目、デザイン科目から構成される「共通基礎科目」である。

英語科目は共通教養科目の中に位置づけられ、卒業要件において最低8単位の取得が義務づけられている。デザイン工学部の英語科目においては、英語をコミュニケーションツールとして十分に運用し、実践に活用する能力を獲得することを最終到達点としている。1～2年次に開講される科目は、基礎的な文法の確認、実用的な語彙の習得、実践的な読解力・リスニング力の強化などを通じ、総合的な英語力の向上を目指している。3年次以降は、ライティングやプレゼンテーションなど特定のスキルやト

ピックに焦点を絞った科目を開講している。また、デザイン工学部の英語科目の象徴の一つが TOEIC-IP テストの活用である。デザイン工学部の入学生には、入学時より定期的に TOEIC-IP テストの受験を義務付けている。スコアは、一部科目の定期試験そのものに使用したり、習熟度クラス編成のクラス分けの判定材料に使用している。

専門科目は各系の教育内容に従って構成されている。

・生産・プロダクトデザイン系

商品が市場で成功するために求められる工学的デザインアプローチとして、消費者の感性やニーズを具現化する新たな“モノ”の姿を構築するとともに、それを実現する「ものづくり」の現場で、問題を発見し解析し、その結果を多くの視点から総合して、在るべき“モノ”と“機能”を創成できる設計能力の修得を目指す教育を行っている。

・ロボティクス・情報デザイン系

身の周りに溢れかえった情報を的確にマネジメントし、生活の質の向上、さらにはよりよい社会構築に繋げていくために、情報の本質の理解から、収集・分析、適切な表現と確実な伝達をロボティクスとソフトウェア、UI/UX デザインを融合させて実現させることで、新たな“コト”の構築と創成ができる設計能力の修得を目指す教育を実施している。

デザイン工学部の教育課程ではデザインと工学の融合を目指している。初年次にはデザイン基礎教育を通じて、学生にデザインすることの意味をインプリンティング（刷り込み、imprinting）し、この基礎教育をベースにして専門教育を積み上げていくことで、デザインと工学の融合を図っている。このようにデザインを基礎とした専門教育を学ぶことを通じて、多様なキャリアプランの中から学生自らが自身の適正にあったキャリア選択をおこなうことができるようになることが意図されており、2-3年次のキャリア科目（共通教養科目）における演習を中心に「社会および産業界と密に連携を取った体験学習」をおこなっている。

デザイン工学部では高大接続の取り組みとして、以前より専任教員による高校への出張講義を実施しているが、2016年度よりスーパーサイエンスハイスクールに指定された高校や、本学への入学者の多い高校を中心に所属専任教員を派遣し、出張授業や高大連携の働きかけを強める取り組みを始めた。またデザイン工学部では、アクティブ・ラーニング科目を積極的に開講し、受動的な講義から能動的な学修の転換を図っている。

また初年次教育においては、1 年前期に共通専門科目「総合導入演習」を必修科目として開講し、大学の学びに必要なリテラシー一般の教育を行っている。同科目はデザイン工学部の複数の専任教員が担当し、少人数グループによるディスカッションやライティング指導、芝浦工業大学卒業生（作家の中村航氏）による講演を通じたキャリア教育、さいたま市産業地域振興課と連携した地域指向の内容などを取り入れている。2017 年度からは 1 年生の後期に 4 つの演習科目を設置し、全学生が必ず 2 つの演習を履修する選択必修としている。これにより早期に将来のキャリアや目標を意識し、実際に手を動かす演習を通して適性判断の一助ともなっている。

芝浦工業大学通論（学長、学部長など大学執行部等による講義）という全学共通科目により、教学理念やビジョン、社会と工学との関わり、大学の過去・現在・未来を多様な視点から捉え、大学で学ぶ意味や学生としての在り方などについて自分なりの考える機会を提供している。

#### ④ 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。

デザイン工学部で開講する科目はすべて、大学 WEB サイト上でフォーマットに則ったシラバスを公開している。シラバスではデザイン工学部の学習到達目標に沿った達成目標の設定の他に、14 週の授業計画と予習復習の内容と想定時間、評価方法と基準など、受講に際して必要十分な情報の記載が為されている。

オンラインシラバスは毎年、担当教員が確認の上アップデートすることが制度化されており、全学的に毎年記載項目の変更等が行われている。これらの変更に対応し、さらに充実したシラバスの作成を促すため、デザイン工学部所属の全教員に対してハンドブックの配布し説明会を実施するなどの取り組みを積極的に行っている。2017 年度はデザイン工学部開講全科目についてシラバスの記載が適切かどうかに関するピアレビューを実施し、結果を報告した。

デザイン工学部では、アクティブラーニング科目を積極的に開講し、受動的な講義から能動的な学修の転換を図っている。2016 年度に開講された科目全 183 科目中、学習者の能動的な学修への参加による授業が大部分をしめるアクティブラーニング科目は 48 科目、同様の学修への参加がおおむね半数を超える科目が 29 科目、1 コマ分以上は同様の学修への参加が取り入れられている科目は 70 を占め、全科目中 80%が何らかの形でアクティブラーニングを取り入れている。

デザイン工学部では、履修上限を年間 49 単位、各期 25 単位以下に設定している。ただし、直前期に GPA3.0 を超える優秀な成績を残した学生については 28 単位まで

の履修を認めている。学生が各期上限の25単位の履修を希望する場合、学年担任による許可を得る必要があり、無理な履修を事前に防ぐ仕組みが導入されている。

新入生に対しては、専任教員と上級生が学習や履修に関わる様々な相談を受け付けるアドバイザーとして配置され、新入生が学習・履修を無理なく行うためのサポートを実施している。また必修や基礎科目を中心に、欠席や問題の多い学生を適宜学年担任に対し通知するなど、教員間で積極的な連携を取ることで早めの指導を実現している。その上で、各期ごとに成績を確認、成績不振の学生をリストアップし、学年担任が逐次学習や履修についての面談を実施している。

#### ⑤ 成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。

成績評価はシラバスに評価基準を表示し、試験、レポート、成果物等による適切な評価を実施している。成績は優（80点～100点）、良（70点～79点）、可（60点～69点）、不可（0点～59点）とし、60点以上をもって合格（単位取得）とする。成績通知書には優、良、可、不可をそれぞれA、B、C、Dと表示する。修得した成績のうち、「S」および「A」評価を4点、「B」評価を3点、「C」評価を2点、「D」評価を1点をとして、各科目の単位数に乗じて得た積（Grade Point）の合計を、登録科目の総単位数で割って算出した数値をGPA（Grade Point Average）と定義し、成績通知書に記載している。

学外単位の認定や海外研修プログラム参加による単位認定については、それぞれ学修の手引きに記載された条件に則って、教務委員会が認定の妥当性を審議し、認定が妥当である場合は卒業要件との対応について提案を行い、教授会の議を経て決定する。

2017年度より全学的に変更されたオンラインシラバス中に、すべての科目の成績評価の合格基準（60点）の目安を客観的な記述で示すための項目が導入された。この項目には、達成目標の各項目がどのような形で評価が実施されるのかをパーセンテージで示すことで、より具体的に成績評価の基準を明示するよう、授業担当教員に指導を行っている。

また成績公開後に学生から担当教員に対して、評価に対する疑問や内容の説明を求めることができる期間が設けられている。これによって評価の誤りを防ぐだけでなく、担当教員が学生に評価の根拠を明示できることが求められる仕組みが整備されている。

デザイン工学部ではディプロマ・ポリシーに則って適切な卒業要件が設定されており、大学の規定に従って、学位授与手続きが運用されている。2017年度入学生の卒業要件においては、総取得単位数 124 単位とし、全学共通科目、共通教養科目を計 28 単位（うち英語科目 8 単位以上・全学共通科目および英語科目を除く共通教養科目 16 単位以上）、共通基礎科目（必修 20 単位・選択 32 単位）、および専門科目（必修 4 単位・選択 40 単位）からなる計 124 単位の取得を卒業の要件としている。卒業要件の詳細な内訳は学修の手引きに表の形で明示されると共に、大学 web サイト上で公開されており（2017 年度については <http://syllabus.sic.shibaura-it.ac.jp/preliminary/dsn/2017.pdf> を参照。）、学生全員が確認できるようになっている。

そのほか開講科目の見直しなど、卒業要件に関わるカリキュラム上の変更が行われた際には、同時に卒業要件についても検討が加えられ、変更が必要であると教務委員会が認めた場合には、教務委員会の提案を教授会議が議決することで卒業要件を改訂することができる。これらの改訂が行われた場合には掲示などを通じて学生に周知されている。

#### ⑥ 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。

デザイン工学部では大学のシステムを利用し、学生の自己評価とその確認を促すために 1 年前期必修の総合導入演習と、4 年総合プロジェクトのためのルーブリックを開発し、定期的に授業において入力を課している。両科目ともに学期中に三度の入力期間を設け、学生が自身の進捗を確認するとともに、授業や研究における課題・学びの内容と、達成目標に関連した技能との関連を逐次確認できるようになっている。

卒業前に実施している満足度についてのアンケートでは、学部教育を通じて得た知識や能力についての質問 6 項目（「学部教育を通して、工学に必要な基礎知識を身につけることができた」「学部教育を通して、工学に必要な専門知識を身につけることができた」「学部教育を通して、大学入学時に比べて、論理的思考力と解析能力、総合的問題解決力が向上した」「学部教育を通して、大学入学時に比べて、広い視野と柔軟な適応力を身につけることができた」「学部教育を通して、大学入学時に比べて、コミュニケーション能力が向上した」「学部教育を通して、大学入学時に比べて、ものごとに自発的に取り組もうとする自主性が向上した」）に対する回答の平均を見ると、2014 年度、2015 年度、2016 年度卒業学生の 8 割程度が肯定的な回答を示しており（2016 年度：十分 34%、やや十分 43.4% / 2015 年度：十



分34%、やや十分46.9% / 2014年度:十分38.6%、やや十分42.8%)、十分に高い自己評価を下していることが見て取れる。

デザイン工学部では1年前期と3年後期に所属学生全員によるPROGテスト受験および、結果説明会へ参加させている(受験者数:2015年度1年生147名・3年生165名、26年度1年生169名、3年生102名、2017年度1年生175名、3年生92名)。PROGテスト(<http://www.kawai-juku.ac.jp/prog/point.html>)は社会で必要とされる様々な技能を多角的に確認するテストであるが、これらの機会を通じて学生本人が1年前期から3年後期までに自身がどれだけ成長したのかを確認し、就職活動に向けて更なる成長を促すことを意図している。

卒業生の意見を聴取する機会としては、2017年度に全学的に実施予定の卒業生に対するアンケート調査の他、2016年3月には新デザイン工学部発足記念パーティーに卒業生を招待し、意見聴取する機会を設けた。同様の取り組みは今後も定期的に行うことを検討している。

⑦ 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

デザイン工学部では全開講科目で学生による授業評価アンケートを実施し、結果を担当教員にフィードバックすると共に本学WEBサイト上(学内ネットワークのみ)で公開している。また教員の資質向上や授業改善のためにFD委員会を中心としたさまざまな取り組みを行っている。定期的に行われる専任教員によるFD研究会においては、それぞれの領域・分野、研究室、担当科目の取り組みと課題について教員間で情報を共有し、改善の検討などを行っている。新任の専任教員は学部として積極的に学内外のFD研修へ派遣し、授業改善の手法を学ばせるとともに最近の大学および大学を取り巻く状況についての理解を促している。

## 〈2〉長所・特色

---

① 授与する学位ごとに、学位授与方針を定め、公表しているか。

デザイン工学部のディプロマ・ポリシーは「社会が求める『あるべき姿(当為)』を構築する設計科学技術』を身につけ、工学的知識と技術を基礎として、人間の感性および社会との調和・融合を図り創造的ものづくり能力、すなわちものづくり全体を表現するための1)認識力、2)構想力、3)計画力、4)意匠・設計力というデザイン能力を身に付けること」という、社会の要請と大学における教育を、「デザイン能力」というキーワードでつないでいるが、これは「社会に学び、社会に貢献する技術者の育成」

という本学の建学の精神を「デザイン」というより現代的な視点からとらえ直した、特色豊かなものである。

② 授与する学位ごとに、教育課程の編成・実施方針を定め、公表しているか。

デザイン工学部では上記のような大学建学の精神に則った特色のある方針に沿って、現代の様々な問題・課題に対して具体的なアプローチを提示するための特色あるカリキュラム・ポリシーを定めている。これは特に、デザイン能力の基礎力育成を目指す共通基礎科目デザイン科目群や、社会と大学をつなぐ試みとしての共通教養科目キャリア科目群のような科目群に象徴されており、カリキュラム全体としてデザイン工学部のオリジナリティーを意識した編成が行なわれている。

③ 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

デザイン工学部では 2017 年度より新カリキュラムを導入しているが、この新カリキュラムの特色の一つは、1 年次の演習科目の強化である。デザイン工学という学問分野は高校までの教育内容に主題的には含まれておらず、ほとんどの新生がデザイン工学という学問分野についての正しい理解を欠いた状態で入学する。旧カリキュラムにおいてもこの課題を解消するために、1 年前期に講義科目の「デザイン工学入門」を配置するなどの形で対応していたが、新カリキュラムにおいては講義科目だけではなく、「デザイン工学演習」「デザイン基礎表現演習」という演習科目を新たに開講することで、より初年度教育に力点をおいたものとなっている。

④ 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。

デザイン工学部では、デザイン工学という学問の特性上、多くの科目で学生の主体的な参加を促すような形での授業運営がなされており、結果として全開講科目中 8 割ほどの科目でアクティブラーニングを何らかの形で取り入れている。

またデザイン工学部の特長の一つとして、新生に対して個別もしくは少人数グループでの相談を受け付けるアドバイザー制度を挙げることが出来る。アドバイザーは教員アドバイザーによるカリキュラムや教育内容を前提とした相談受付だけではなく、上級生がつとめる学生アドバイザーからの、より学生目線でのニーズや内容に関する細かな履修相談も平行して行っている。

⑤ 成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。

デザイン工学部開講科目の成績評価はシラバスに記載された基準に則って行われており、単位の認定もこれに沿って適切に行われている。

⑥ 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。

デザイン工学部ではルーブリックの活用や学生アンケート調査を中心に、学習成果や学生のニーズの把握に努めている。

⑦ 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。

デザイン工学部では教授会委員会である FD 委員会を中心に、全専任教員が関わる FD 研究会を通じて教員の資質向上や授業改善に向けた取り組みを積極的に行っている。

### 〈 3 〉 問題点

---

⑥ 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。

上述のようにデザイン工学部では PROG テストを活用し、学生の学習成果の測定を行っている。しかしカリキュラム内容に沿ったより詳細な学習成果の把握のためには、プレースメントテストとその後の GPA スコアの変遷の比較や、アセスメントテストの実施など様々な施策の積極的な活用を検討するべきである。

### 〈 4 〉 全体のまとめ

---

デザイン工学部では適切に設定されたディプロマ・ポリシーの基にカリキュラム・ポリシーを定めており、これらはすべて本学 WEB サイト上に公表されている。デザイン工学部の開講科目はすべてこのカリキュラム・ポリシーにそって体系的に開設されている。このカリキュラムにおいてより効果的な教育を実施するために、オンラインシラバスにおける成績評価基準の公開や、アクティブラーニング的要素の積極的な導入などを推し進めている。デザイン工学部の開講科目における成績評価および単位認定はルールに則って適切に実施されており、その学習成果の把握には一定の課題が残るものの、現状でもルーブリックやアンケートを通じて把握に努めており、FD 研究会のような教員組織による学習改善の取り組みが積極的に行われている。

### 〈 5 〉 根拠資料一覧

---

•

## 第 5 章 学生の受け入れ

### 〈 1 〉 現状説明

#### ① 学生の受け入れ方針を定め、公表しているか。

デザイン工学部では、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーの 3 つのポリシーを定め、大学 web サイトに掲載している[資料 5-1-1]。

ディプロマ・ポリシーでは、学位授与方針を明確にするため、以下の学修・教育目標を定めている。

(学修・教育目標)

- ・ 技術と人間・社会・自然との関連について幅広い知識を身につけ、地球的視点・歴史的視点をふまえながら多面的に物事を考えることができる。
- ・ 技術が世界と社会、自然に及ぼす影響や効果、そして社会に対して負っている責任を理解し、技術者として高い倫理観に基づき行動できる。
- ・ 社会的要請や利用者からの要望を理解し、関係する人々とのコミュニケーションを図りながらチームで仕事ができる。
- ・ 専門領域の知識・技術を修得して意匠力・設計力を身につけ、これらをものづくりの場で応用して問題を解決できる。

上記の目標を達成するため、カリキュラム・ポリシーにおいて、教育課程の編成について述べている。工学と人間の感性および社会との調和・融合を図り、創造的なものづくり能力を素養にもつ、実践的な人材を育成するため、次のように科目を編成している。

#### 1. 共通教養科目

人間・社会を理解するための科目から構成。人文系科目を低学年次、社会科学系科目を高学年次に担当。

#### 2. 共通基礎科目

工学の基礎知識を修得するためのサイエンス科目、エンジニアリング科目デザイン科目から構成。低学年次に集中配置。

#### 3. 専門科目

デザイン工学の体系を構成する主要な専門科目を厳選して配置。

#### 4. 総合プロジェクト

卒業研究（論文・製作・制作など）

ディプロマ・ポリシーおよびカリキュラム・ポリシーに基づき、入学に当たり必要な知識を示すために、アドミッション・ポリシーにおいて以下のように求める人物像を定めている。なお、アドミッション・ポリシーについては入試要項にも掲載している[資料 5-1-2]。

（求める人物像）

- 十分な基礎学力に加えて、21世紀における社会と産業が求める技術者をめざす人。
- 創造的な発想と、問題発見・解決能力、そして総合的な視野に立ち自律的に思考できる素養を持つ人。
- 多彩な才能と可能性を秘め、国際社会、産業、個人の生活・関心の変化に対して敏感に適応できる人。

また、同ポリシーにおいて高等学校等において身につけておくことが望ましい能力とその判定方法として以下を挙げている。

（身につけておくことが望ましい能力）

- (1) 高等学校等の課程で学ぶ知識・技能（特に外国語、数学、理科）
- (2) 思考力・判断力・表現力等の能力
- (3) 主体性をもって多様な人々と協働して学ぶ能力

（判定方法）

- 前期、後期、全学統一日程、英語資格・検定試験利用方式入試では、(1)を重視するとともに、記述式試験により(2)を評価する。
- 大学入試センター利用方式では、多科目の合計点により(1)の総合的な能力を重視した評価を行う。
- 指定校推薦、併設校推薦及び附属校推薦では、調査書により(1)(2)を評価し、面接により(1)(2)(3)を総合的に評価する。
- 外国人特別入試・現地外国人特別入試では、筆記試験、外部検定試験等により(1)(2)を評価し、及び面接により(1)(2)(3)を総合的に評価する。

**② 学生の受け入れ方針に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や運営体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。**

デザイン工学部の選抜方法は、前出のアドミッション・ポリシーに基づき、多彩な才能と可能性を持つ学生を受け入れることを目的に 2017 年現在、①数学、理科、英語等の学力を判定する一般入試（前期日程、英語資格・検定試験利用方式、全学統一日程、後期日程、センター利用方式）、②高校生活を通じた継続的な学力を総合的に判定する推薦入試（併設校、指定校）、の 2 つの入試形式の他、外国人留学生を対象とする特別入試に種別される多様な入学試験を実施している[資料 5-1-2]。

学部の入学者選抜全般に関する事項については、関連組織と協調して企画・立案・実施する学部横断組織であるアドミッションセンターが設置されている。また、選抜方法については、工学部、システム理工学部と同様、入試要項や大学 web サイトで内容を公表し、周知を図っている。また合否の判定については、学部長の他、入試委員およびアドミッションセンター員、アドミッション専門員で「合否判定会議」を組織し、合格最低点、補欠範囲等を協議しながら合格者を決定し、判定案について教授会に諮り承認を得ることにより、透明性、公正性を担保している[資料 5-1-3] [資料 5-1-4]。

また、入学を希望するものへの合理的な配慮として、障がい学生の受け入れについても大学の方針に従って積極的に取り組んでいる。出願希望者について、あらかじめ入試課に相談する旨を入試要項目に明記し[資料 5-1-2]、受験上の配慮が可能な出願希望者と学科が面談して、入学後の支援措置について協議している。（入試課開設以来 2 名の学生（2013 年度に 1 名、2016 年度に 1 名）がそれぞれ入学し、順調に修学を続けている）。

**③ 適切な定員を設定して学生の受け入れを行うとともに、在籍学生数を収容定員に基づき適正に管理しているか。**

入学定員の 1 学年 160 人に対し、2017 年度入学者数は 175 人であり、定員に対する比率は 109.4% である[資料 5-1-5]。これは開設より一貫して定員を超えており、2017 年度より入試が 2 つの系へと再編され、定員増となっても十分な数の学生数を確保している。編入学については、当該学年および学部全体の定員充足率を基に募集の可否および定員を毎年決定しているが、定員充足率が十分であることから 2015 年度以降の学生募集は行っていない。

4 学年全体では 2017 年度現在の在籍学生数は 660 名と、収容定員の 580 名に対して定員充足率は 111.7%となっている[資料 5-1-5]。2016 年度は定員の 120%を超える入学者を受け入れることになるなど、定員充足率は漸増傾向(2014 年:114.8%/2015 年 116.6%/2016 年度 117.9%)にあったが、これまでの入試傾向を踏まえ定員増を行ったことで定員に対する入学者比率が低下し、定員充足率の減少となった。

④ 学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

デザイン工学部では、入学試験の方式、入学試験方式別の募集人数、および入学試験の合否判定について、アドミッションセンター及び入試課より提供されるデータ(これまでの志願者状況および偏差値)等をベースとして入試委員会を中心に検証・検討を行い、年度毎に教授会で審議・決定している。入試の結果については選抜方法ごとに学部長室会議、学科会議等で報告を行い、検証を行っている。

また、推薦入試合格者に対して学習の習慣づけのため入学前準備教育を実施している。このうち数学・英語については e ラーニングにより行っており、課題の進捗率が追跡できるようになっている。さらに、入学時には全入学生に対し習熟度別クラス編成のために数学、物理、英語に対する試験を課している。これらの結果については入学時の基礎学力を示すものとして学生が所属する系および選抜方法ごとに分析を行っている。

これらの分析を基に、2017 年度入試では英語資格検定試験を使用した入試方式の導入と、質の高い入学者を確保するための推薦入試における推薦基準の見直しを行った。

## 〈2〉長所・特色

---

学生の受け入れ方針の決定及び公表に関しては、デザイン工学部では 2016 年度に全学での取り組みの一環として 3 つのポリシーの見直しを行い、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーと一体的に運用されるアドミッション・ポリシーに基づいた入試の実施に向けた改訂を行った。

学生募集および入学者選抜方法の実施計画などの判断・実施にあたっては、学科規模もあるが構成員の意思の疎通が図りやすく、学部一致体制が形成されている。

学生の受け入れに関しては、現状、定員充足率が 100%を切ったことはないものの、今後の少子化傾向を鑑みると定員充足への努力も平行して行う必要がある。そのため、2017 年度より学部内に企画広報委員会を設置し、学部を対外的に積極的に広報し、十

分な入学志願者を確保する体制を整えている。また、2016年度より女子高を対象として高校訪問を実施し、高校や高校生のニーズ把握に努めるとともに、高大連携を進めるための出張授業やものづくり演習、ワークショップの提案を行い、デザイン工学という新しい分野の理念を周知すべく活動している。

### 〈3〉問題点

---

定員の管理に関しては、入学定員に対する入学者数の超過、および収容定員に対する在籍学生数の超過が課題として挙げられる。現状ではこれらの比率はそれぞれ109.4%、111.7%であり、定員を一割程度超える状態が続いている。定員に対する入学者比率を引き下げる努力が必要であり、そのためには、一般入試における合格発表者数に対する実際の入学者数の見込みの精度を、過去の入試実績を蓄積することで高めていく必要がある。また、2017年度入試では学科を構成する2つの系の入学者数に偏りが見られたため、是正のための取り組みが必要である。ただし入学後の系の移籍希望者には、学修の手引きに則って移籍を認めている。この際、良好な学修環境提供の観点から、人数が一定以上超える系には移籍を認めない内規を定めているため、結果として系間の人数バランスの是正が進む可能性がある。

入学者選抜制度の設定に関しては、アドミッション・ポリシーにおける各選抜方法が「高等学校における身につけるべき能力」を評価する尺度にすべて適切に対応しているわけではないため、今後「思考力・判断力・表現力」などを総合的・多面的に評価する選抜方法の検討が必要である。現在の選抜方法の多くは学力試験（筆記試験）に頼っており、今後「総合的・多面的」な評価の観点を取り入れた選抜方法の検討が必要である。

また、2017年度よりデザイン工学科の入学定員は160名へと増員されると同時に、入試についても現行の3領域4分野から2つの系へと再編されたばかりである。そのため、学生の受け入れの適切性についてはこれからの動向も見極めていく必要がある。それにあたり、これまでの志願者状況および偏差値等の入学前データを基にした分析だけではなく、入試選抜方式と卒業時の成績の相関を調査する追跡調査を始めている。

### 〈4〉全体のまとめ

---

これまでの志願者状況および偏差値等からこれまでの学生募集および入学者選抜は、大学の基本方針と学部のアドミッション・ポリシーに則って、適切に検証され、公正かつ適正に実施されている。



2017 年度よりデザイン工学科の入学定員は 160 名へと増員されると同時に、入試についても現行の 3 領域 4 分野から 2 つの系へと再編された。2017 年度の新カリキュラム導入後も引き続き、入試委員会を中心にアドミッションセンターや入試課と連携・協働し、公正かつ適正な学生募集と入学者選抜を実施していく。

また、学部開設より十分な数の志願者数および入学生を確保してはいるものの、さらなる定員充足率の適正化と受け入れの適切性の検証を進めるべくデータを活用した取り組みを進めていく必要がある。

## 〈 5 〉 根拠資料一覧

---

- [資料 5-1-1] デザイン工学部 - 3 つのポリシー [http://www.shibaura-it.ac.jp/faculty/engineering\\_and\\_design/policy.html](http://www.shibaura-it.ac.jp/faculty/engineering_and_design/policy.html)
- [資料 5-1-2] 一般入学試験要項 [http://www.shibaura-it.ac.jp/examinee/general\\_exam/examination\\_literature.html](http://www.shibaura-it.ac.jp/examinee/general_exam/examination_literature.html)
- [資料 5-1-3] 芝浦工業大学アドミッションセンター規程
- [資料 5-1-4] 芝浦工業大学学部合否判定会議内規
- [資料 5-1-5] 2017（平成 29）年度 芝浦工業大学 大学基礎データ

## 第6章 教員・教員組織

### 〈1〉現状説明

- ① 大学の理念・目的に基づき、大学として求める教員像や各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。

デザイン工学部の教員は、建学の精神ならびに学部の教育目標を十分に理解したうえで、日々の研鑽と、不断の努力により、学生の成長を促す優れた教育を行う人間性と、高度なデザインと工学に関する専門性を有することが求められる。

また、世界の持続的発展に資する国際的に通用する研究教育を行い、その研究成果をもとに社会および学術の発展にデザイン工学の観点から寄与することが求められる。

デザイン工学部の教員組織の編成方針は、以下のとおりである。

デザイン工学部では、学部のディプロマ・ポリシーにのっとり、工学的知識と技術を基礎として、人間の感性および社会との調和・融合を図り創造的ものづくり能力をもとに社会が求めるあるべき姿(当為)を構築する設計科学技術を身につけた人材を育成することを目標としている。

これを実現するために、以下の方針により教員組織を編成する。

- 1) 高い倫理観と社会性を有し、デザイン工学を通じて社会に貢献しようとする志をもつ教員を配置する。
- 2) グローバル社会に求められる多様性を十分に理解し、これらに配慮した教員の採用・編成を行う。
- 3) 高度な専門知識を有し、国際的に高く評価される研究力を備えた教員を編成する。

デザイン工学部の求める教員像、専門分野に関する能力や教育に対する姿勢は、特に採用において吟味される。公募においては、博士の学位を有し、英語による授業が可能であることを応募資格として必ず求めている。さらに専門分野をデザイン工学分野へ展開・融合するビジョンを必ず提出させており、これを重視した選考を行っている。

デザイン工学部では、豊富な実務経験を有し、デザイン工学の幅広い分野での実践的教育に対応できる教員を中心に教員組織が編成されている。教員の構成については、3領域4分野のカリキュラム設計に適合するよう、各領域分野の教員数および各教員の専門分野はそれぞれの領域分野の学生定員のバランスを考慮し決定されている。ま

た、2017年以降のカリキュラムは2つの系からなる構成となったが、旧構成と新構成のバランスも考慮して決定されている。

デザイン工学部には学科は一学科（デザイン工学科）のみ存在するが、学科内の3領域4分野（2017年以降は2つの系）がそれぞれのカリキュラムに基づいて指導に当たっている。この領域・分野の間での連携や調整をおこなうため、毎月1回程度、学部長、学部長補佐1名と3領域4分野（ならびに2つの系）の代表である領域分野幹事と共通系幹事による領域・分野幹事会議を開催している。学部長室は、学部長と学部長補佐に加え、デザイン工学部所属の学長補佐1名と各領域幹事が兼務する学部長室員4名から構成され、事務職員を加えて毎月1回程度会議を開催し、学部運営上の課題解決や中長期的な運営方針を議論している。教授会は8月を除き毎月1回開催している。教授会規則により教授会常設委員会として教員資格審査委員会、教務委員会、単位認定委員会、FD委員会、入試委員会、共通科目委員会、企画広報委員会を設置している。一学部一学科のため構成員は同一であるが、学科会議もほぼ毎月1回開催することで教職員間の密な連携体制を確立している。以上の各種委員会や会議の目的・役割・責任所在は明確にされている。

## ② 教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。

デザイン工学部には2017年現在、プロダクトデザイン領域に8名（うち任期付き特任教員1名）、エンジニアリングデザイン領域にはメカトロ組み込み分野5名と生産システム分野4名、建築空間領域の任期付き特任教員2名の計19名の専門科目担当教員と、共通科目を担当する5名の教員（うち任期付き特任教員2名）が所属し、専任教員数は大学設置基準を満足している。所属専任教員24名は、教授12名、准教授8名、助教4名によってバランス良く構成されている。なお、上記とは別に建築空間領域の兼務教員4名がいる。

新規の専任教員採用については、領域分野幹事会議と学科会議において承認された教員採用計画に基づいて教員採用委員会を中心に人選をおこない、教授によって構成される教員資格審査委員会の賛成を経て、大学の規定に従って採用が決定される。

全開講科目の担当教員の割り当ては、領域・分野・系、共通系内での配置をもとに、毎年学科会議で確認・検討を行っている。非常勤教員が担当する開講科目は、各領域・分野・系と共通系がそれぞれの関連分野に分類され、それぞれの科目に対して専門分野に近い専任教員が世話役として配置されている。新規に非常勤教員を採用する際には科目世話役の意見を反映し、教員採用委員会が公募を実施している。

**③ 教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。**

新規の教員募集はデザイン工学部教授会による審議を経て、公募により実施される。教員資格審査は大学設置基準、および大学の専任教員人事規定と任用手続き規定に沿って、教員資格審査委員会によって実施されている。専任教員の公募に際しては、学部長室会議、学科会議等での議論を経て、研究分野等の公募要領をデザイン工学部教授会において審議される。

専任教員の昇格については、デザイン工学部内規に従い実施される。年度ごとに、各領域・分野からの推薦を受け学部長が教育・研究業績を確認の上、面談を行い、教員資格審査委員会、教授会の審議を経て実施される。非常勤教員の昇格は大学の非常勤人事規定に従って学部長室会議での確認の上、教授会の審議を経て実施される。

**④ ファカルティ・ディベロップメント（FD）活動を組織的かつ多面的に実施し、教員の資質向上及び教員組織の改善・向上につなげているか。**

FD活動は小規模学部としては活発に行われている。常設のFD委員会を中心に、学部全体でFD活動に積極的に取り組んでいる。FD委員会では本学優秀教育賞への推薦者の選考に当たっているほか、授業改善など様々なFDに関係するテーマについて、デザイン工学部専任教員が参加する研究会を定期的に主催している。この研究会では、各専任教員が研究室や領域・分野・系を紹介することでお互いの理解を深めたり、ルーブリックやティーチング・ポートフォリオ、オンラインシラバスの改善といった全学的なFD活動の取り組みについて紹介し、運用方法の改善を議論するといった活動を行っている。

デザイン工学部所属専任教員は毎年度、教育・研究等業績評価シートをもとに自己点検を実施するとともに、学部長がその内容を確認することで、個々の教員の目標と達成度合いの適切さを確認している【資料 6-1】。また、2017年度よりFD活動の一貫としてシラバスの相互チェックを開始した。各教員が互いのシラバスを予め決められたチェックシートにより確認し、問題がある場合は担当教員に連絡される仕組みを構築した。

**⑤ 教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。**

教員組織のあり方については、学部長室において年に一回の見直しを行っている。組織の見直しに当たっては、各委員会の業務内容を勘案し、突出して負荷が掛かっている教員がないかなどの観点から検討している。

例えば、2016年度までは入試委員会の業務負担が大きかったため、企画広報委員会を立ち上げ、オープンキャンパスや高校訪問などの業務を受け持つこととした。これにより入試委員会の業務負担が軽減された。また、企画広報委員会は目的が明確になったため、例えば展示スペースの管理など、従来、責任が不明確だった事項を業務としてハンドリングできるようになった。

## 2) 長所・特色

---

①の教員像や組織編成の方針の明示に関しては、公募要領に明示され、それに従った選考を行っている。また、各種委員会はその目的・役割・責任所在を明確にした上で設置している。

②の適切な教員組織の編成に関しては、本学科は3領域4分野構成であり、また2017年度からは2つの系からなる構成への移行期間中にある。カリキュラムはさまざまな専門性が混在しており、この中で主要授業科目に適正な専任教員の配置を考慮して行く必要がある。これについては新カリキュラムを検討した時点で人員計画を策定しており、これにしたがってバランスよく構成されている。

③の適切な教員の採用に関しては、特に女性教員の採用を重視している。2017年度の2名の採用により女性比率はさらに改善し、現在24名中5名が女性教員である。女性比率がより改善することが望ましいが、相対的には高い値であるといえる。また、開設時にやや偏りの見られた教員組織の年齢構成であるが、採用計画に従ってほぼ適正な水準まで改善した。2013年度の4名の専門教員の採用、さらに2017年度の3名の専門教員の採用により、年齢構成のバランスを大きく改善した。国際性に関しては、外国で学位を取得した教員を2017年度に2名採用し、現在4名となっている。また、海外において1年以上研究を行った教員は現在4名である。これらも相対的に高い値であるといえる。

④のFD活動について、2016年度は3回研究会を開催した。2つの系という新たな構成における教育内容の確認、対外アピール戦略等について検討を進めた。また、100分14週に向けた授業デザインならびにシラバスの書き方について講演会を開催し、それに引き続き、教員相互に意見交換を行った。

⑤の教員組織の定期的な点検・評価については、年に一回の見直しを行っている。

## 〈3〉問題点

---

②の適切な教員組織の編成に関しては、引き続き移行期にあるため当初計画にしたがいながらも、その時々の問題に対処し適切な編成を行って行く必要がある。特に、デザイン工学部は、教員数に比して教授会組織や担任業務などを含む校務に必要な人員が多い。教育の充実や研究活動のさらなる促進のためにも、専任教員の負担を解消するための施策が求められる。

③の適切な教員の採用については、新構成への移行完了からさらにその先に向けた長期ビジョンを策定する必要がある。同時に近々の課題としては、大宮キャンパスにおける共通基礎科目の学修支援の問題がある。専門分野を教える教員の多くが芝浦キャンパスにいる現状において、1・2年生に授業外学習支援を含む共通基礎科目の教育環境を整える必要がある。また、女性教員や国際性のある教員の相対比率については、さらなる改善が求められる。

⑤の教員組織の適切性の評価については、ある程度の根拠に基づいた評価を行ってはいるものの、十分に定量的な評価となっていない面もある。評価方法の改善が求められる。

#### 〈4〉全体のまとめ

---

①の教員像や教員組織編成の方針については、各種委員会ならび各種会議の目的・役割・責任所在は明確化されている。②の適切な教員組織の編成に関しては、バランスよく構成されているものの、専任教員の負担がやや大きいという問題もある。③の適切な教員の採用については、各種手続きや規定にしたがって実施されており、女性教員比率も比較的高い。今後はより長期のビジョンの策定が求められる。④のFD活動については、教員の資質向上や組織の改善に向けて、さまざまな活動が行われている。⑤の教員組織の適切性の評価についても問題なく実施されているが、評価のさらなる定量化が求められる。

#### 〈5〉根拠資料一覧

---

- 資料 6-1: 教育・研究等業績評価シート